

慶南青年カレッジ2010

代表者 井柳卓也（工学部B2）
構成員 羽田紀子（教育B2年） 赤星冴（教育B2年） 堀真奈美（教育B2年）

1. 取組状況及び実施内容

① 歓迎式（博多国際フェリーターミナル） 福岡市

日本側参加者の代表数名は下関国際フェリーターミナルまで迎えに行った。横断幕や韓国語での歓迎の挨拶など、歓迎の気持ちを伝えるため、趣向をこらした。韓国側参加者も、長時間の船旅で疲れているにもかかわらず、日本側の歓迎に笑顔で答えてくれた。バスでの移動中に、班ごとにわかれて自己紹介やゲームを行った。バスの中でアイスプレーキングをおこなったため、例年よりも打ち解けられるのが早かった。

② ワークキャンプ（桂岩ふれあいセンター） 美祢市

日韓の参加者が合流した後、美祢市の桂岩ふれあいセンターに行った。ここでは、蕎麦打ち・餅つき体験、温泉体験、夕食交流会を行った。蕎麦打ち・餅つき体験では、講師の先生方に教えてもらいながら、日本の文化体験を楽しんだ。参加者は、協力しながら一生懸命、餅やそばを作った。日本人参加者にとっても、初めて体験する人が多く、みんな積極的に活動していた。夕食交流会では、会話をはずませながら、みんなで作った餅とそばを食べた。その後の交流会では、さらにお互いの仲を深めていくことができた。花火大会では韓国側参加者にとって手持ち花火はとても珍しかったようだが、共同生活の一日でもあり花火のおかげでなかが深まったように感じた。



博多港での歓迎式



蕎麦打ち体験

③ 平和学習

3-1 平和記念資料館・平和記念公園見学 広島市

平和記念資料館の館内では全員が見入っており1時間という時間では物足りないと感じた。日本人参加者が韓国人参加者に説明をする姿を見てみんなが戦争の悲惨さについて知りたい・学びたいという熱意が伝わってきた。中には平和について討論しながら見学する参加者もあり、とても嬉しく感じた。新参加者は前半の日程で約300羽の鶴を一緒に折っており、記念館でも貞子さんのお話が展示してあったので千羽鶴の意味を理解したうえで奉納を行うことができた。この資料館から発信する世界へ向けたメッセージを真摯に受け止めていきたいと思う。

3-2 折り鶴奉納

慶南青年カレッジでは日本人・韓国人被爆者慰霊碑の両方に折り鶴の奉納を毎年行っている。戦争の犠牲に会った方に哀悼の意をこめて一分間の黙とうも行った。実際に被害に遭われた同胞があったことに韓国側学生は驚きと悲しみが交差しているようであった。慶南青年カレッジでは日本人犠牲者の慰霊碑ならびに韓国人犠牲者の慰霊碑にも千羽鶴を奉納している。お互いの国のことを平和と通して学ぶことができ、両国の学生にとってとても貴重な体験になった。

3-3 平和の語り部

細川浩史（ほそかわこうじ）さん 17歳の時、爆心地から1.3kmの広島通信局（現在の広島郵便局）で被爆した体験と、建物疎開作業中被爆死した妹の生と死をたどりヒロシマを伝承している。戦時中のヒロシマの状況を

暗い印象でお話するだけでなく、講演が暗くなってしまわないように、冗談を交えながら語って下さった。お話の中で一番印象に残っていることは、被爆経験者の講演者が、河原で瀕死状態の少年たちに水を求められた時の話だ。細川さんは、その少年たちに水をあげたかったそうだが、やけどのひどい人に水をを与えると、すぐに死んでしまうと聞いていたため与えなかったそうだが、実際は水を与えても与えなくても、結果としては死んでしまうのだという。語り部さんはそれを知り、与えれば良かったと後悔していると話していた。時代が過ぎる毎に、被爆者が高齢となって、次第に人数が減ってきている。伝承する人が絶えてしまわないよう願う。

3-4 平和ディスカッション・平和の木作成

広島平和記念公園見学・語り部さんのお話が終わり、五つの班に分かれて平和ディスカッションを行った。終戦記念日は日本人にとってはマイナスなイメージであるが、韓国人にとっては開放された日であるというプラスイメージな日であること、日本人被爆者慰霊碑には鶴奉納の台があり、雨をしのげるが、韓国人死没者慰霊には鶴を奉納しても雨をさえぎる屋根がなく寂しく感じるという意見もきくことができた。そしてディスカッション終了後に平和への想いを「平和の木」として作成した。日本語・ハングル・英語など様々な国の字で想いがつづられている。



原爆ドーム



両国のリーダーによる千羽鶴の奉納



平和の木

④ホームステイ（一般家庭・学生宅）

4-1 一般家庭

毎年のことながら、行程前半のハイライトは「ホームステイ」である。今年も11家庭にお世話になった。対面式では、緊張を隠せない韓国の学生たちだが、家族と触れ合うことで、安心した表情に変わったのが印象的だった。盆踊り体験や家族行事への合流、ご近所さんとの夕食会など、各ご家庭が想いをこめた家族サービスに一同感激していた。

4-2 学生宅

最終日の夜は、交流会が終わった後、日本人参加者の自宅（下宿）へホームステイをした。韓国の学生は、家族と一緒に暮らすことが多いようだが、山口大学の学生は、ほとんどが下宿しているため、韓国の参加者に日本の学生の一人暮らしの様子を体験してもらった。夜は、慶南青年カレッジでの楽しかったことや日韓の違い、家族や恋人の話など、寝る時間がなくなるほど語り明かした。お互いの意見を聞くことも立派な国際交流である。翌日の朝食は、日本人参加者が日本の朝食をもてなした。各自学生宅ホームステイを楽しみ、韓国側参加者にとっては、日本の学生の生活の様子を学ぶいい機会となった。また、お互いの仲間意識がより一層深まることとなった。



ホストファミリーとの顔合わせ



学生宅ホームステイ

⑤韓料理講習交流会 山口市

このプログラムは、料理を通じて相互に学びあうことに視点が置かれている。韓国から現地の材料を持参して本格的な家庭料理も披露された。また、日本の家庭料理については、山口市連合婦人会の方々に指南いただきながら、日韓両学生が料理からおもてなしを勉強することができた。また、交流会では一般宅ホームステイでお世話になったホストファミリーにも方々ご参加いただき、楽しく有意義な交流を深めることができた。



料理交流会の様子

⑥表敬訪問

6-1 県庁表敬訪問 山口市

山口県庁では、渡辺観光振興局長が出迎えて下さった。渡辺局長からの挨拶をいただき、韓国人学生が一人ひとり日本語での自己紹介をした。韓国側リーダーは代表者として今回の活動に参加する気持ちなどを語ってくれた。また、県庁職員の方からは、最近の韓国ブームに関する質問コーナーもあり、終始なごやかな様子であった。

6-2 萩副市長表敬訪問 萩市

萩副市長は日韓親善協会萩会長もされている。セレモニーでは各々自己紹介を行い、萩市内観光の感想や今回の活動に参加するにあたっての思いなどを語った。萩市は韓国・蔚山市と日韓最初の姉妹都市で、職員の相互交流も進んでいることもあり、職員の方は、韓国に精通している方が多く、思わず話が弾んだ。



表敬訪問

⑦環境学習

7-1 海岸清掃とゴミ分析 長門市

毎年お世話になるこの海岸は、一見とてもきれいな海岸と思われるが、いざ、清掃作業に入ると意外なほど出てくる「ごみごみごみ」。全員が取り組んでも全部取りきれているか不安になるほどである。集積場にて分析してみると、残念なことにハンブルで書かれた容器も出て来た。日本だけではないこの環境破壊の実態を目の当たりにした作業であった。

7-2 地引網

海岸清掃の後、日本の伝統的な漁業法である地引網に挑戦した。韓国の学生だけでなく日本の学生も普段は体験できないことなので、とても良い経験になった。みんな一生懸命引っ張り、成果を期待した。しかし、近年は網にかかっている魚よりも海底に沈んでいる様々なゴミが深刻さを増していることを体感し複雑な心境を感じた。

7-3 環境ディスカッション

海岸清掃・地引き網を終え、萩青年の家で環境に関するディスカッションをおこなった。五つの班に分かれ、海岸清掃の感想やこれから私達にできるエコについて話したり、お互いのゴミの分別・ゴミの概念についても話し合ったりした。予定していた時間がたりなくなるほどみんな真剣に環境保全について、私達ができることを真

剣に話し合っていた。

7-4 ポスターセッション

地引き網・海岸清掃・環境ディスカッションの内容について、後日ポスターセッションをおこなった。地引き網や海岸清掃を行った写真やハングル表記の漂着物も掲示し、環境問題について日本だけで考えることは難しいことであることを痛感した。また、環境ディスカッションで話した内容もものせていたため、日韓の環境への考え方の違いがわかり、多くの人がポスターに見入っていた。



海岸清掃



地引網で頑張る様子



ポスターセッション

⑧歴史散策 萩市

市内散策では、各観光地にチェックポイントをおき、課されたお題やご当地クイズに答えながら萩の城下町を散策した。おもしろいクイズを交えながら班員で協力しゴールを目指した。あつい八月の日差しに負けない参加者の笑顔がとてもまぶしかった。

⑨伝統文化体験「大内塗」 山口市

山口市ふるさと伝承センターで、室町時代から現代まで引き継がれている大内塗りの箸の絵付けを行った。大内塗りは日本人参加者の中でも初体験の人もいた。慎重に漆を塗り、金箔を使って装飾を施し、世界に一つだけの大内塗りの箸を完成させた。出来上がりに時間がかかるため、まだ手元に届いてはいないが、出来上がりがとても楽しみである。地元の伝統文化を知るよい経験となった。

⑩別れセレモニー 門司港

門司港へ向かうバスの中、私たちはやってくる別れの時間を気にしながら最後の話をしていた。慶南青年カレッジをやり遂げた達成感と、みんなと9日間過ごせたこと、そしてなにより慶南青年カレッジをしてよかったという思いでいっぱいになった。バスは門司港に着き、班ごとに分かれて写真を撮り、プレゼントを渡などした。乗船時間が近づくとメンバーの目には涙が浮かんでいた。船の上から、または駐車場から、お互い大きく手を振った。最初の顔合わせのときと比べると驚くほど仲良くなり日本での日韓交流が成功に幕を閉じた感動的な別れだった。また冬アジで再開を果たしたい。



門司港で最後の集合写真

⑪実行委員会について

11-1 企画運営状況

日本側スタッフ5名、韓国側スタッフ3名で企画、準備、運営を行ってきた。毎週集まり、資金調達や活動内容、広報などを行った。また、事業への募集説明会や各大学での周知宣伝活動も行った。特に、4月末に訪韓し各参加大学でのプレゼンテーションでは、片言の韓国語ではありながら、PPTやポスターセッション、寸劇を取り入れた魅力ある内容で、参加した韓国側学生からは参加意欲を高揚するに十分な評価を得た。

11-2 韓国側リーダーとの交流(長門市・鯨まつり)

今年の韓国側リーダー達との初対面は慶南青年カレッジの本番でもお世話になる長門市で行った。1日目は「鯨まつり」に参加した。辛ラーメンや韓国のり、ソジュを販売し、町の人に韓国の味に親しんでもらい、「慶南青年カレッジ」の活動を紹介した。また、この時に環境に関する意識調査を長門市民を対象に行い、漂着するゴミや環境に関する意見を聞くことができた。二日目は海岸の清掃、海岸の清掃活動では、予想よりも多くのゴミが見られ、みんな驚きながら一生懸命ゴミを拾った。1時間ほどで約20袋分のゴミを拾い、海岸のゴミの多さを実感した。環境問題を考える足掛かりとして、とても意義のある活動だった。その後、通(かよい)地区の方に歓迎会をしてもらった。腕をふるった料理をいただいたり、韓国の音楽について話をしたりした。この2日間で長門市の通地区の方々、そして日韓コアの結束が固まり信頼感が高まった。



仁済大学校でのプレゼンテーションの様子



通いクジラ祭り

⑫冬の慶南青年カレッジ 韓国

慶南青年カレッジは、夏は日本人のコアスタッフが企画、運営し、冬は韓国人のコアスタッフが行うようになっている。夏には、環境と平和をテーマにディスカッションをしたが、冬には、日韓の就職と成人式について討論した。全く耳にしたことがなかった韓国の就職、成人式事情を聞いて、国の位置的にも文化的にも近いにも関わらず、日韓のお互いの驚くべき発見があった。今回の冬の慶南青年カレッジは、伝統文化体験をする機会がとても多かった。韓国の伝統楽器であるサムルノリ体験、伝統工芸の刺繍体験、韓国式蹴鞠のチェギチャギ体験、伝統仮面工芸に韓屋体験など、盛りだくさんだった。様々な文化体験から、異文化を知るためには、実際に目で見て触れて体験することだと強く思った。異文化を知ろうと、本やインターネットで調べるより、直接自分が経験することによって、様々な発見をすることができる。今回初めてチェギチャギを試みたが、テレビや友達が簡単そうにやっているのを見るより、案外難しかった。毎年このプログラムで訪れる場所がある。それは、慶州ナザレ園だ。戦時中に韓国人の男性と結婚した身寄りのない日本人女性が、余生を過ごされている養老院である。昨年参加者として参加した時にお会いしたおばあさんが、お元気に過ごされており、とても嬉しかった。おばあさんたちに歌を歌ってほしいと言われ、日本人は「ふるさと」を、韓国人は韓国の歌を歌った。とても喜んで頂き、歌を歌った後は、おばあさんたちとお話をした。初めて会ったとは思えないくらい親しくお話をすることができ、とても有意義な時間だった。別れの時間が来ると、おばあさんやメンバーは、目に涙を浮かべ、再会を約束した。気づきとして、私たちは遊ぶときは精いっぱい楽しみ、また、ディスカッションの時は真面目になることを目標としていたが、今回の慶南青年カレッジではきちんと、場面に応じてけじめがついていたと振り返った。



伝統仮面工芸



慶州ナザレ園での様子

⑬山口市日間親善協会 韓国語・日本語弁論大会 山口市

年に一度、山口市日韓親善協会主催のやまぐち韓国語・日本語弁論大会が開かれる。この弁論大会へは、毎年慶南青年カレッジ参加者が参加しており、韓国語で「日韓の友好」などについて発表している。今年も慶南青年カレッジの参加者が韓国語で弁論大会に参加した。また、慶南青年カレッジについての説明を行った。年間を通しての日韓友好の活動に、たくさんの来場者から良い活動だねと声をかけていただいた。また今年は、その会場において慶南青年カレッジの環境活動についてのポスターセッションを行った。ポスターセッションでは、夏に日本の長門で開催された慶南青年カレッジでの、清掃活動を中心に報告した。長門市での2度にわたる海岸清掃や、拾ったゴミについての展示も行った。このポスターセッションや慶南青年カレッジの説明によって、多くの方にこのプロジェクトを知ってもらいきっかけになったと思う。



活動報告の様子

⑭IYEO 中国ブロック大会に参加 鳥取県

2010年9月に鳥取県で開催されたIYEOの中国ブロック大会に慶南青年カレッジ2名のコアが参加した。一日目は三徳山の三仏寺投入堂に行った。日本一危険な国宝とも言われており、下を見ると引き込まれそうな感覚にもなったが、あんなに立派な風景や投入堂を見ることができ、貴重な体験になった。夜には参加者の方との食事会をし、自分たちがしている国際交流について語り合った。翌日は慶南西南カレッジの発表の場を設けて頂き、国際交流を多くしている先輩方からアドバイスなどを頂いた。

2. 最後に

この慶南青年カレッジの特徴は、企画から運営まで、すべてを日韓の学生が主体となって行っているところにある。日本人学生が企画する夏の慶南青年カレッジでは、山口県で日本文化や風土を体験してもらうことはできないかと考え、プログラムを企画した。日本伝統文化体験として、餅つきやそば打ちを行ったり、山口の伝統工芸である大内塗を体験したり、国の史跡に指定されている瑠璃光寺五重塔の見学や日本の歴史的な町並みが残る萩市散作をしたりと、山口県で体験できる日本の良さを十分にプログラムの中に取り入れることができた。慶南青年カレッジに参加した韓国人参加者には、山口県の大学で留学を決めた学生もおり、山口県の良さを伝えることができたと思っている。また、このプログラムを通して、同じ世代の韓国の友人をつくることができたことが、かけがえのない財産になった。韓国の学生と行った「平和学習・環境学習でのディスカッション」を通して、考え方や価値観の違いを知り、それを尊重していこうという姿勢が学生の中に見られた。このように他国の考え方を理解することが国際交流を進めていくうえで必要なことであると肌で感じた。国際交流と聞くとなかなか手の届かない、とても難しいもののように思うが、慶南青年カレッジを通して、その考え方が変わったように思う。今までは日本という狭い世界の中でしか生きていなかったが、この経験により、この世界には様々な人がおり、その人たちと自分は努力すれば分かりあうことができるということ、そして、そんな世界中の人々に出会うことはとても素晴らしいということを感じた。国際交流活動で様々な人と出会い様々なことを学ぶことで、自分の世界観や価値観が広がる。参加者の一人としての質を変えた活動になったのではないと思う。